

1 解析データ

(1) 県警自殺統計データ(平成22年)

神奈川県警から提供された、平成22年中の横浜市における自殺者のデータ。以下、「県警データ」とする。

2 解析方法

(1) 単純集計、クロス集計

(2) 比率の差の検定、母比率の検定

3 結果(県警データの解析)

(1) 総自殺者数および性別自殺者数

平成22年の横浜市における総自殺者数は、746人(男性:529人、女性:217人)で、男性が70.9%を占めた。平成21年の総自殺者数(663人)と比べ、12.5%増であった。

(2) 年齢階級別自殺者数

年齢階級別に自殺者数をみると、男性は40歳代が117人(22.1%)で最も多く、女性は60歳代が44人(20.3%)で最も多かった(図1)。

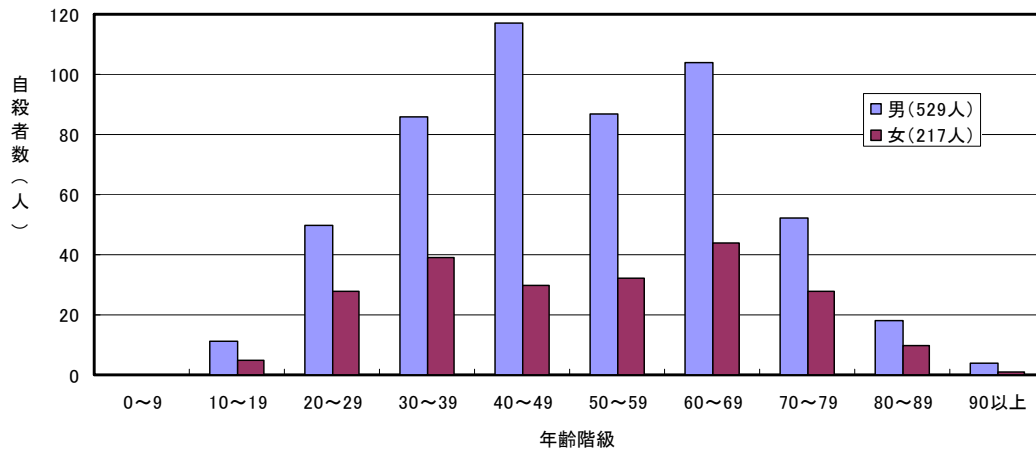


図1 性・年齢階級別自殺者数

(3) 月別自殺者数

月別に自殺者数をみると、7月と10月が73人(9.8%)で最も多く、次いで11月が68人(9.1%)で多かった。性別にみると、男性では7月が55人(10.4%)で最も多く、女性では10月が26人(12.0%)で最も多かった(図2)。

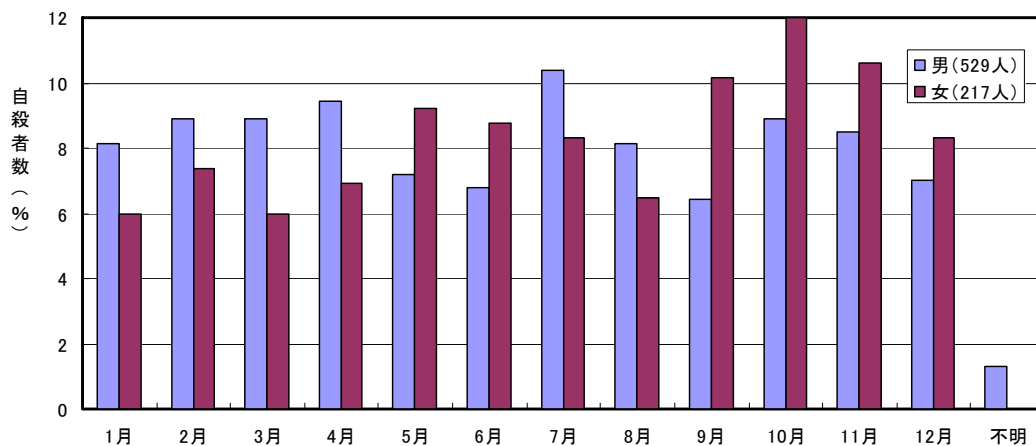


図2 月別自殺者数

(4) 曜日別自殺者数

曜日別に自殺者数をみると、木曜日が112人(15.0%)で最も多く、次いで月曜日が103人(13.8%)、金曜日が101人(13.5%)が多かった。性別にみると、男性では月曜日が82人(15.5%)で最も多く、女性では日曜日と金曜日が38人(17.5%)で最も多かった(図3)。

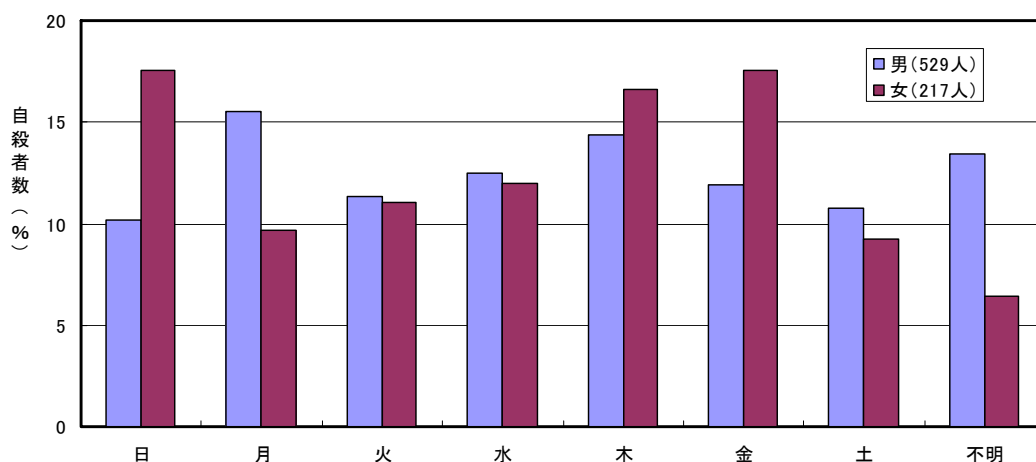


図3 曜日別自殺者数

(5) 時間別自殺者数

自殺の時間が判明した者439人(男性310人、女性129人)について、時間別に自殺者数をみると、14時台が34人(7.7%)で最も多く、次いで0時、9時、12時台が26人(5.9%)が多かった。性別にみると、男性では14時台が25人(8.1%)で最も多く、女性では12時台が11人(8.5%)で最も多かった(図4)。

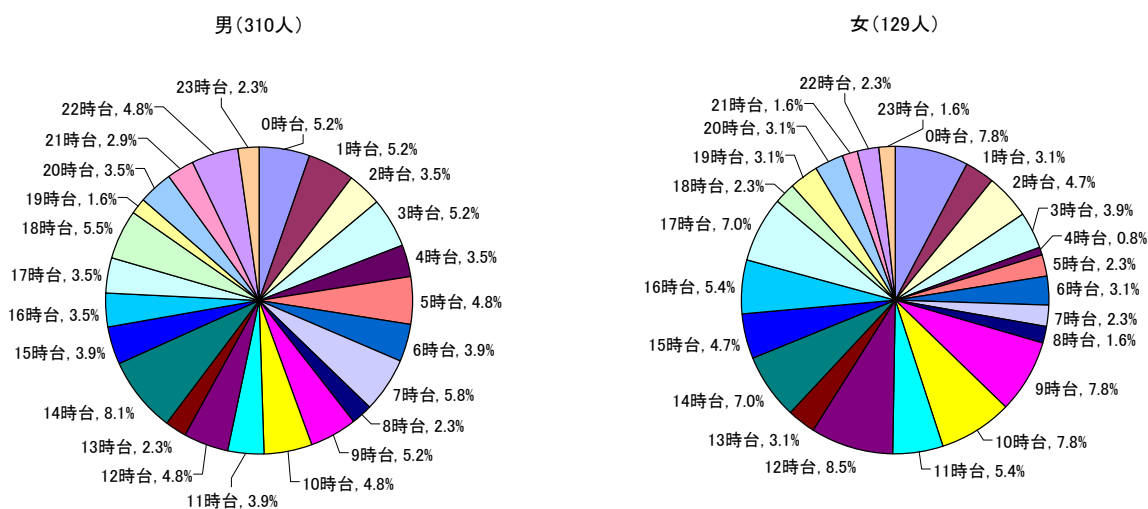


図4 時間別自殺者数

(6) 自殺の場所

自殺の場所別に自殺者数をみると、男女共に「自宅」が最も多く、男性326人(61.6%)、女性167人(77.0%)であった。次いで多いのは、男性では「公園」33人(6.2%)で、女性は「高層ビル」14人(6.5%)であった(図5)。

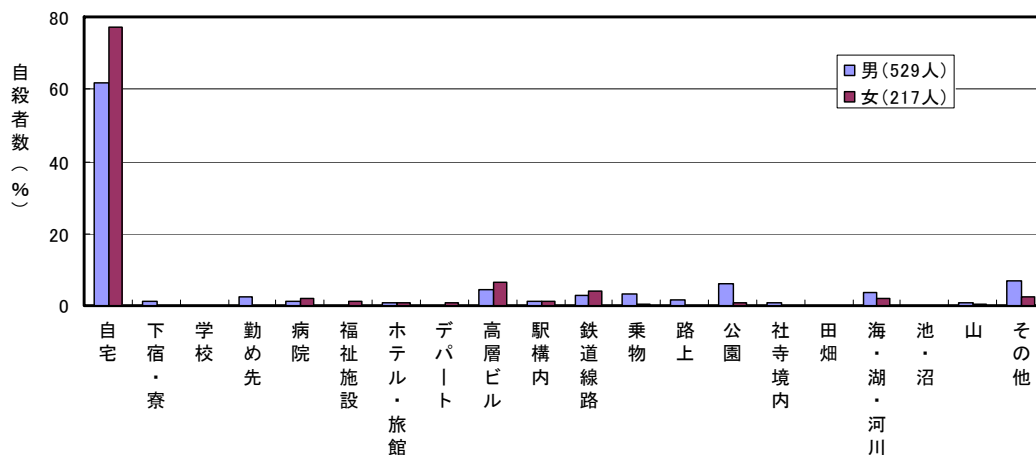


図5 自殺の場所

平成21年の県警データから、自殺者の発見地と生前の居住地について、市区町村レベル(横浜市では区単位)までの情報が提供されるようになった。このことから、横浜市内で発見された自殺者が生前の居住地とは異なる場所で自殺したのかを把握することが可能になった。

横浜市で発見された自殺者746人(男性529人、女性217人)のうち、居住地が市内の者は718人(男性509人、女性209人)で、全体の96.2%を占めていた。

一方、自殺者の居住区と発見された区に違いがあるかをみると、居住区と同じ区で発見された者は654人(男性456人、女性198人)で、全体の87.7%であった。

さらに、自宅以外で自殺した者253人(男性203人、女性50人)についてみると、居住区と同じ区で発見された者は164人(男性131人、女性33人)で、自宅以外で自殺した者の64.8%を占めていた(図6)。

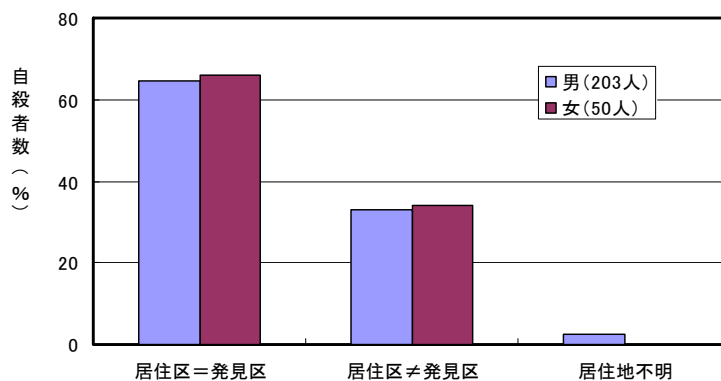


図6 自宅以外で自殺した者の居住区と発見された区

(7) 自殺の手段

自殺の手段別に自殺者数をみると、男女共に「首つり」が最も多く、男性304人(64.0%)、女性107人(56.9%)であった。次いで多いのは、男性では「練炭等」で51人(10.7%)、女性では「飛降り」で33人(17.6%)であった(図7)。

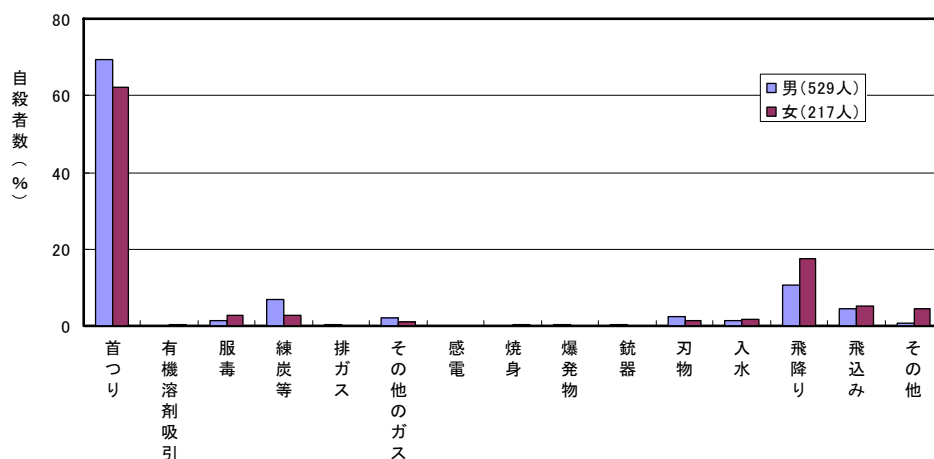


図7 自殺の手段

(8) 自殺の場所×自殺の手段

自殺の場所ごとに自殺の手段の内訳をみると、男女共に「自宅での首つり」が最も多く、男性266人(50.3%)、女性126人(58.1%)であった。次いで多いのは、男性では「公園での首つり」29人(5.5%)、「高層ビルからの飛降り」と「その他での首つり」21人(4.0%)で、女性では「自宅からの飛降り」16人(7.4%)、「高層ビルからの飛降り」14人(6.5%)であった(表1)。

表1 自殺の場所×自殺の手段(上位10位)

男					女				
順位	場所	手段	人	(%)	順位	場所	手段	人	(%)
1	自宅	首つり	266	50.3	1	自宅	首つり	126	58.1
2	公園	首つり	29	5.5	2	自宅	飛降り	16	7.4
3	高層ビル	飛降り	21	4.0	3	高層ビル	飛降り	14	6.5
3	その他	首つり	21	4.0	4	自宅	その他	8	3.7
5	自宅	練炭等	20	3.8	4	鉄道線路	飛込み	8	3.7
6	自宅	飛降り	14	2.6	6	自宅	服毒	6	2.8
6	鉄道線路	飛込み	14	2.6	7	自宅	練炭等	5	2.3
8	乗物	練炭等	13	2.5	8	海・湖・河川	入水	4	1.8
9	勤め先	首つり	12	2.3	9	自宅	刃物	3	1.4
10	その他	飛降り	10	1.9	9	病院	首つり	3	1.4
					9	駅構内	飛込み	3	1.4
					9	その他	飛降り	3	1.4

(9) 職業カテゴリ

職業別に自殺者数をみると、男女共に「無職者」が最も多く、男性271人(51.2%)、女性171人(78.8%)であった。次いで多いのは「被雇用者・勤め人」で、男性176人(33.3%)、女性28人(12.9%)であった(図8)。

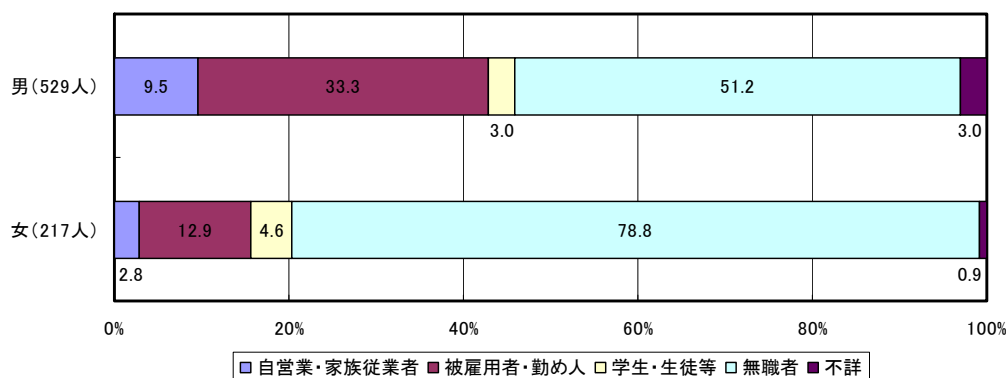


図8 職業カテゴリ別自殺者数

(10) 原因・動機の判断資料

「遺書」、「自殺サイト・メール等への書き込み」、「その他の生前の言動」といった、自殺の原因や動機を判断する資料(以下、「判断資料」とする)を残していた自殺者は、407人(男性278人、女性129人)で、全体の54.6%を占めた。判断資料を残して自殺する者の割合に、男女間(男性52.6%、女性59.4%)での有意な差は認められなかった。

判断資料の内訳をみると、男女共に「遺書」が最も多く、男性195人(36.9%)、女性72人(33.2%)であった。また、「遺書」と「自殺サイト・メール等への書き込み」では男女間に有意な差は認められなかったが、「その他の生前の言動」(男性15.7%、女性25.8%)については、男性より女性が有意($p < 0.01$)に高かった(図9)。

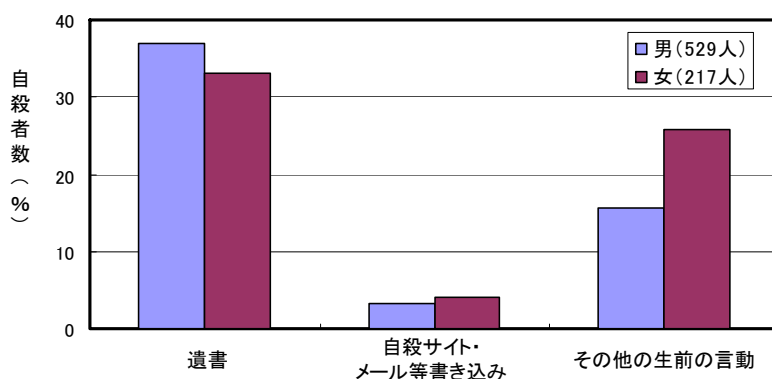


図9 原因・動機の判断資料

なお、2つの判断資料を残していたのは、25人(男性17人、女性8人)で、判断資料を残した者の6.1%であった。判断資料の組み合わせをみると、全ての組み合わせが見られたが、「遺書」と「生前の言動」の組み合わせが最も多く、18人(男性13人、女性5人)であった(表2)。3つの判断資料を残した者はいなかった。

表2 判断資料の組み合わせ

男\女	遺書	サイト・メール ¹⁾	生前の言動 ²⁾
遺書	-	2	5
サイト・メール ¹⁾	2	-	1
生前の言動 ²⁾	13	2	-

¹⁾自殺サイト・メール等への書き込み

²⁾その他の生前の言動

(11) 原因・動機

原因・動機は53種類の中から最大3つまで挙げられている。また、自殺の原因・動機は7つのカテゴリ(『家庭問題』『健康問題』『経済・生活問題』『勤務問題』『男女問題』『学校問題』『その他』)に分類されている。

判断資料を残した407人(男性278人、女性129人)のうち、1個の原因・動機が確定された者は262人(男性180人、女性82人)で最も多く、64.4%(男性64.7%、女性63.6%)を占めていた。

一方、複数の原因・動機が確定された者は139人(男性92人、女性47人)であった。そのうち、原因・動機が2個の者は97人(男性62人、女性35人)で、判断資料を残した者の23.8%(男性22.3%、女性27.1%)であった。また、原因・動機が3個の者は42人(男性30人、女性12人)で、判断資料を残した者の10.3%(男性10.8%、女性9.3%)であった。

なお、判断資料があるものの、自殺の原因や動機が判明しなかった者は男性6人であった(図10)。

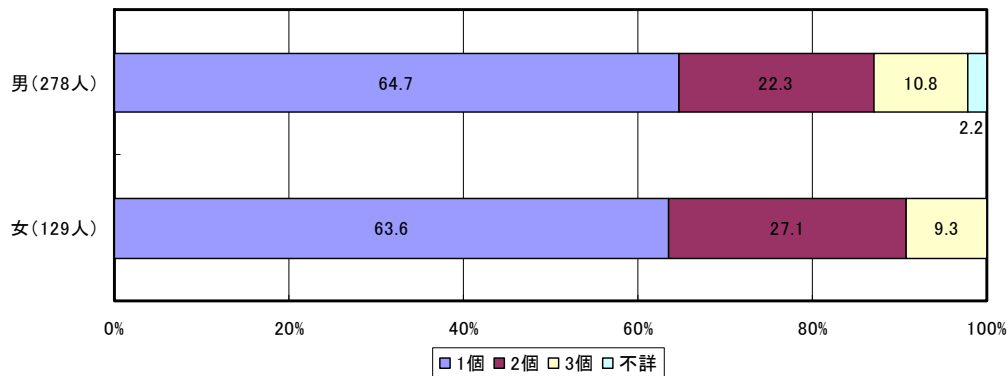


図10 原因・動機の数

判断資料を残した407人について、原因・動機をカテゴリ別にみると、『健康問題』が含まれる者が男女共に最も多く、男性139人(50.0%)、女性102人(79.1%)であった。次いで、男性では『経済・生活問題』が90人(32.4%)で、女性では『家庭問題』が36人(27.9%)で多くみられた(図11)。

判断資料を残した者のうち、原因・動機に『家庭問題』が含まれる者は男性より女性が有意($p < 0.05$)に高く、『健康問題』でも男性より女性が有意($p < 0.01$)に高かった。また、『経済・生活問題』では女性より男性が有意($p < 10^{-6}$)に高く、『勤務問題』でも女性より男性が有意($p < 0.05$)に高かった。

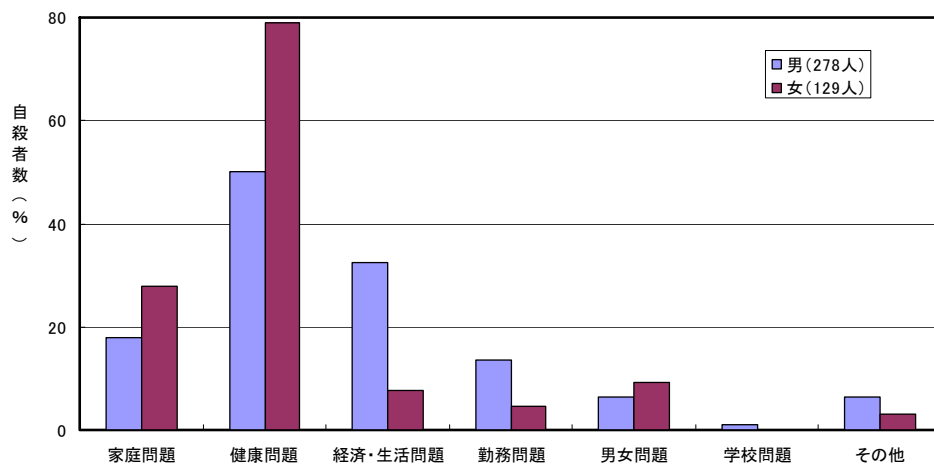


図11 原因・動機カテゴリ

男女共に原因・動機に多く挙げられている『健康問題』は、8個の項目(「身体の病気」「うつ病」「統合失調症」「アルコール依存症」「薬物乱用」「その他の精神疾患」「身体障害の悩み」「その他の健康問

題)」で構成されている。

原因・動機に『健康問題』が含まれる241人(男性139人、女性102人)のうち、「うつ病」が挙げられた者は131人(男性64人、女性67人)で男女共に最も多く、『健康問題』が含まれる者の54.4%(男性46.0%、女性65.7%)を占めた。次いで多いのは「身体の病気」78人(男性50人、女性28人)で、32.4%(男性36.0%、女性27.5%)であった。『健康問題』に限らず、他のカテゴリの原因・動機を合わせてみても、判断資料を残した407人のうち、「うつ病」が挙げられた者は最も多く、次いで「身体の病気」を挙げられた者が多くなっている。

(12) 自殺未遂歴の有無

自殺未遂歴の有無についてみると、男性では、自殺未遂歴「あり」が76人(14.4%)、「なし」が318人(60.1%)、不詳135人(25.5%)であった。女性では、自殺未遂歴「あり」が82人(37.8%)、「なし」が110人(50.7%)、不詳25人(11.5%)であった(図13)。自殺者のうち、自殺未遂歴「あり」の者の割合は、男性より女性が有意($p < 10^{-11}$)に高かった。

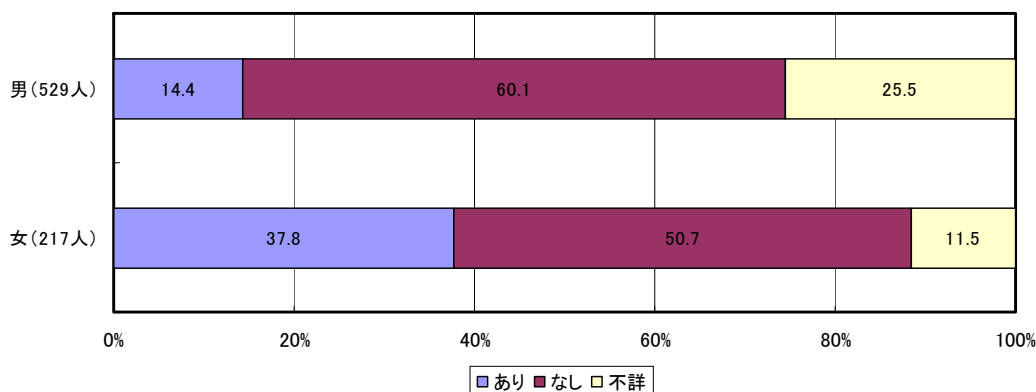


図12 自殺未遂歴の有無

(13) 自殺未遂歴×判断資料の有無

自殺未遂歴と判断資料の有無の関連をみたところ、男性では、自殺未遂歴があった76人のうち、判断資料を残した者は52人(68.4%)であった。一方、自殺未遂歴がなかった318人のうち、判断資料を残した者は166人(52.2%)であった。女性では、自殺未遂歴があった82人のうち、判断資料を残した者は57人(69.5%)であった。一方、自殺未遂歴がなかった110人のうち、判断資料を残した者は58人(52.7%)であった(図14)。男女共に、自殺未遂歴がある者はない者より、判断資料を残す割合が有意($p < 0.05$)に高かった。

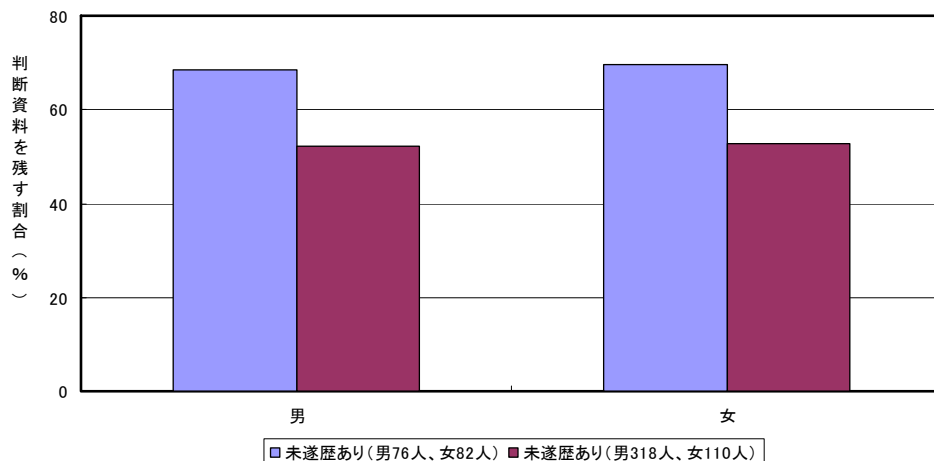


図13 自殺未遂歴×判断資料の有無

(14) 自殺未遂歴×原因・動機カテゴリ

自殺未遂歴が分かり、かつ、判断資料から原因・動機が分かる者(男性218人、女性115人)について、自殺未遂歴によって原因・動機に違いがあるかを調べた。男女共に、自殺未遂歴の有無によって、原因・動機の各カテゴリに有意な差は認められなかった(図14)。

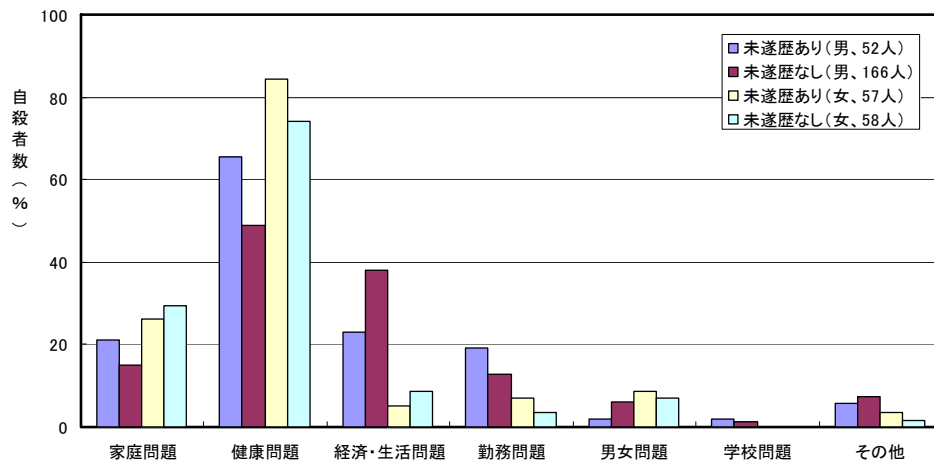


図14 自殺未遂歴×原因・動機カテゴリ

(15) 職業カテゴリ×原因・動機カテゴリ

判断資料を残した407人(男性278人、女性129人)において、職業によって原因・動機のカテゴリに違いがあるかを調べた。

男性では「自営業・家族従業者」は全体よりも『経済・生活問題』を原因・動機に含む者の割合が有意($p < 10^{-5}$)に高かった。「被雇用者・勤め人」は全体よりも『勤務問題』を含む者の割合が有意($p < 0.001$)に高かった。「無職者」は全体よりも『健康問題』を含む者の割合が有意($p < 0.01$)に高く、『勤務問題』を含む者の割合は有意($p < 0.01$)に低かった(図15)。

女性では、「被雇用者・勤め人」は全体よりも『勤務問題』を含む者の割合が有意($p < 0.001$)に高かった。「無職者」は全ての動機において、全体との有意な差は認められなかった(図16)。

なお、男性の職業カテゴリ「学生・生徒等」「不詳」、女性の職業カテゴリ「自営業者・家庭従業者」「学生・生徒等」「不詳」および男女共の原因・動機カテゴリ「学校問題」は少数であったため、解析しなかった。

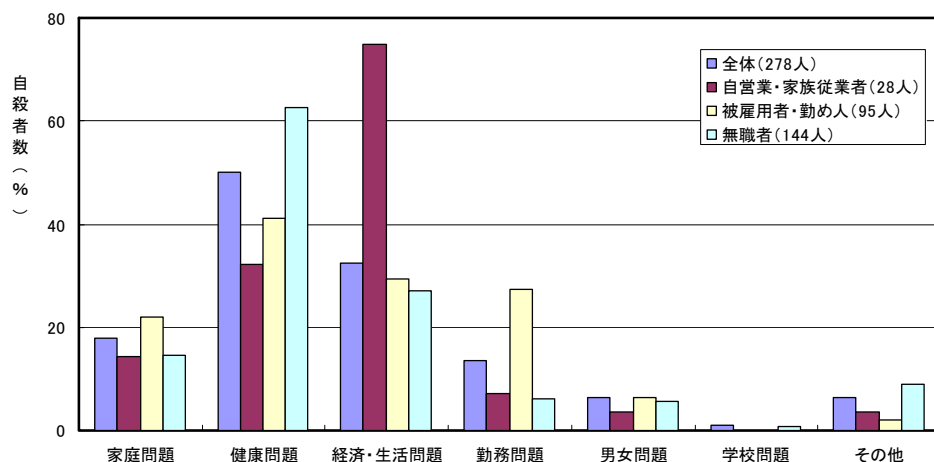


図15 職業カテゴリ×原因・動機カテゴリ(男)

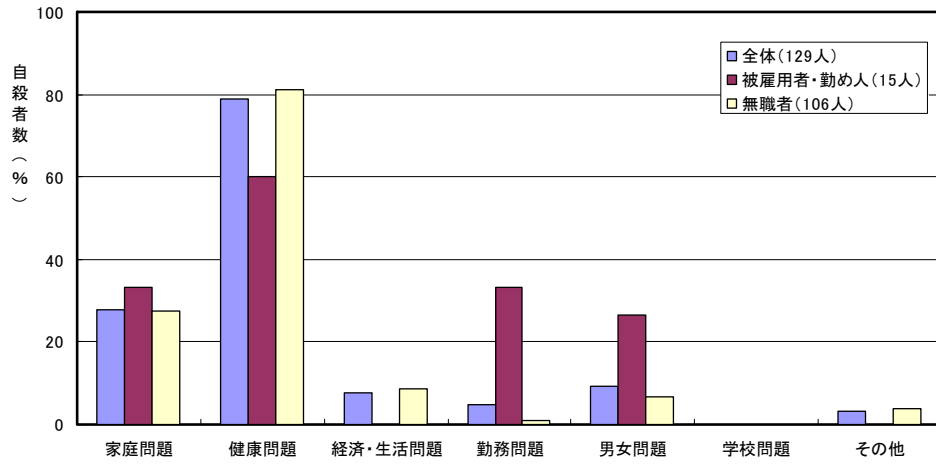


図16 職業カテゴリ×原因・動機カテゴリ(女)